

子どもたちに 原発も核もない未来を！ 2003年6月7日(土)代々木公園



「百人のゴスペル」という迫力あるオープニングセレモニーに始まり、小木曾美和子さんの主催者あいさつ、全国からのアピールが続いた。新潟・福島・静岡・青森・大阪・岐阜…。なかでも、静岡のメンバーによる『東海地震が来る前に浜岡原発を止めよう！』という、歌ありバンドあり太鼓ありのパフォーマンスに、広場は沸いた。自然エネルギーの展示の多さも目をひいた。太陽光パネル・太陽電池・風力発電・パラボラ型のソーラークッカーなど。

さて、いよいよパレード。色とりどりの旗や横断幕、笛や太鼓にギターに三線…。長い長いパレードが、混雑する渋谷・原宿を進む。

2万人が参加した「日比谷公園の全国集会」から14年。今年、なぜ全国集会なのかなと思ったが、やっぱり今なのだろう。「もんじゅ」の敗訴、東電に端を発し国・電力会社が一体となったヒビ割れ隠し、すべての原発が止まっても停電にならないという事実、近づく大地震などなど。この日の参加人数は、主催者発表で5千人。比較的高い年齢層のなかで、パレードが終わっても踊り続ける、若者たちの元気が光って見えた。

(橋本京子)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

新体制（新代表・新事務局長）発足!! —総会&チェル救デー開催—

5月のよく晴れた日の午後、名古屋市内の某所で、2003年度の新役員を決定する運営委員会が開かれていた。注目の新代表には事務局員Yを擁立するべく、昨年か
根回しがなされていた。しかしYは、チェル救発足以来事務局長を務めていたKが、
かねてから引退を目論んでおり、その後継者の最有力候補でもあった。会議は波乱含
みとなった。2年間の代表の重圧から、今まさに解放されようとしているOも、こ
この成り行きを固唾を飲んで見守っている。重苦しい空気が会議室に漂い、それぞれの
思惑が交錯する…。そこに一人、2年前まで代表を務めていたので、まさか自分には
声がかからないだろうと楽観、いや油断しているTがいた。絶妙な会議進行で定評の
あるJは、今こそ自分の出番だと考え「新代表T/新事務局長Y」というウラトラCを
提案、両者の説得に乗り出して、混迷状態の代表選出にとどめを刺した…。2時間
におよんだ手に汗にぎる会議は、こうしてめでたく幕を閉じたのである。(完)

6月14日にNPO交流プラザで開かれた総会で、**田中良明新代表、山盛三千枝新
事務局長**が誕生し、新体制がスタートしました☆ 代表を含む10人の理事（市原佳
代・大谷早苗・河田昌東・神野英樹・田中良明・戸村京子・中島しぐれ・橋本京子・
原富男・山盛三千枝）と監事（神野美知江）は全員再任で、手堅い体制となりました。
なお、前事務局長の河田さんは、今後も変わらず事務局員として活動します。

総会では、出席された会員の方から、今後の事業に関する提案が出されました。以
下はその質疑応答です。

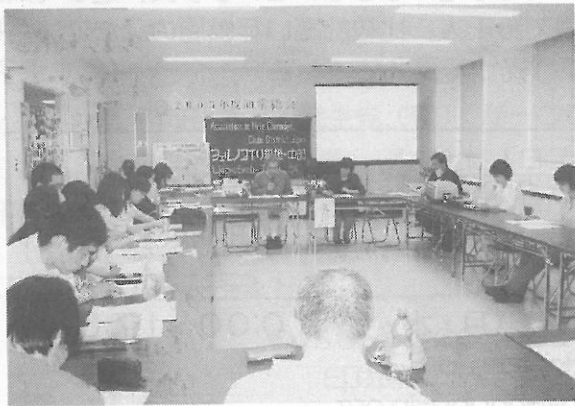
出席者：「チェルノブイリ事故後15年以上経過したので、**事故の影響の分析・調査の
プロデュース**をしたらどうか。資料集めの費用として、例えば年間予算の1割程度
の100万円くらいを計上し、現地のニーズも踏まえて、現地とタイアップして実
施する。調査・研究対象は限定してもよいし、総合調査でも良い。」

議長：「現時点でも、現地から持ち帰った事故の影響のデータを、既にいくつか持って
いるが、中には分析が滞っていて死蔵となっているものもある。救援・中部だけ
は、なかなか手一杯でやりきれていない。」

出席者：「外部委託でもよいのでは？」

理事：「専門家の協力を仰ぎながら、救
援・中部としても、ぜひ取り組んで
いきたい。」

最後に、なごやかな雰囲気のもと懇
親会を行い、総会を終了しました。ま
た来年もぜひお越しください。お待ち
しています。 (市原佳代)



今年のチェル救デーは

“ぜんぶ” アレクシエーヴィチさん

今回のチェル救デーは、10月の来日・講演会を4ヵ月後に控えて、第1部…2年前にアレクシエーヴィチさんが出演した番組『ロシア 小さき人々の記録』（NHK放映）の上映、第2部…アレクシエーヴィチさんの著書



＜チェル救・朗読一座＞

『チェルノブイリの祈り』の朗読、となりました。アレクシエーヴィチさんの招聘は、「救援・中部」の今年度の目玉事業であり、長年の夢でもありました。それを、会員の方に理解していただく絶好のチャンスだと考えて取り組みました。

『ロシア 小さき人々の記録』は、初めて見る方も多く、その映像から伝わる悲惨な事実に、改めて衝撃を受けていらっしゃる様子でした。アレクシエーヴィチさんの講演に先駆けて、彼女の映像を見ていただくことができたのは、彼女の人間性に触れるという点でも、よいアイデアだったなと思います。

『チェルノブイリの祈り』の朗読は、朗読歴3ヵ月、着実にその腕をあげている「チェル救・朗読一座」によるもので、ウクライナ講座でも好評を博しています。朗読は、自ら読むのとは違い、その抑えた読みから伝わる情感が会場を埋め尽くし、静かな感動が生まれました。

毎年、総会との合同イベントとして、チェル救デーを開催しています。これは、一人でも多くの会員・非会員の方に総会に出席してもらい、「救援・中部」の活動に参加していただけたら…との考えによります。来年も、皆様のご期待を裏切ることなく続けていきますので、ご参加をお願いいたします。

（市原佳代）

『チェルノブイリの祈り』から抜粋

妻と娘を病院に行かせました。二人は身体じゅうに黒い斑点ができていました。検査をされました。「検査の結果を教えてください」と頼んだら「あなたがたのための検査じゃない」といわれた。「じゃあ、いったいだれのための検査なんですか？」

当時はそこらじゅうでだれも彼もがいていた。「死んでしまう、死んでしまう。2000年までにベラルーシ人は全滅してしまうだろう」と。ぼくの娘は6歳だった。寝させようとベッドに入ると、ぼくの耳元でささやく。「パパ、あたしね、生きていたい。まだちっちゃいんだもの」。娘はなにも理解していないだろうと思っていたんです…。

あなたは、頭がツルツルの女の子を一度に七人も想像できますか？ 妻が病院からもどって、こらえきれずにいった。「あんなに苦しむのなら、あの子は死んだほうがいいんだわ。あるいは、私が死ねばいいのよ。これ以上見なくてすむもの」。

ぼくは証言したいんです。「ぼくの娘が死んだのは、チェルノブイリが原因なんだ」と。ところが、ぼくらに望まれているのは、このことを忘れることなんです。

—ニコライ・フォミーチ・カルーギン（父親）—

～8月のウクライナ講座のご案内～
アレクシエーヴィチ講演会 プレ企画第3弾!!
「ボタン穴から見た戦争」読書会

チェルノブイリ原発事故の証言を集めた「チェルノブイリの祈り」、1979年ソ連アフガン侵攻、その戦争を経験した「アフガン帰還兵の証言」。そして、第2次世界大戦時、ドイツ軍に侵攻されたベラルーシの人々の惨禍を、子ども達の側から証言した「ボタン穴から見た戦争」…。今回は前2冊に続き、「ボタン穴から見た戦争」の読書会を行います。

内容は、子ども達の声を集めたものですが、とても衝撃的です。今回は「救援・中部」のメンバーが、「旧ソ連の国々の体験した対独戦」についても報告します。特に朗読会というわけではありませんが、参加者の皆さんと一緒に、読み合い、語り合いたいと思います。

これらアレクシエーヴィチさんの著作を読んで、10月18日(土)の名古屋講演会へお出かけいただければ、講演会がより充実すること請け合いです。お一人で、あるいは、お友達とお誘いあわせの上、皆さんでご参加ください。お待ちしております。

日時：8月23日(土)午後1時30分～4時(※今回は、通常と異なり第4土曜日です。)

会場：あいちNPO交流プラザ(地下鉄市役所下車 2番出口 徒歩3分)

映画「ヒバクシャー世界の終わりに」(監督・鎌仲ひとみ)完成!!

是非ご覧ください!!



名古屋上映会

日程 9月6日(土)

会場 名古屋市女性会館・ホール 3F

上映時間

①11:00～ ②14:00～ ③18:00～

講演 14:10～ 「国境のない核汚染」

講演者 チェルノブイリ救援・中部 河田昌東氏
前売券・1,000円 / 当日券・1,200円

* チケット申込み・予約は、チェルノブイリ救援・中部事務局 TEL 052-836-1073
あいち教育映画 TEL 052-509-2651

1991年に始まった湾岸戦争で使われた劣化ウラン弾95万発。それを発射した米兵はもとより、イラクの多くの子ども達が被弾し、被曝によって白血病や癌に犯された。経済封鎖で、緊急に必要な薬も供給されず、子ども達は死んでいく。その一人、少女ラシャは、この映画を作った鎌仲さんに、一枚のメッセージを記した紙切れを残した…。「私を忘れないで。」

長崎に投下された原爆のプルトニウムを製造した核兵器工場、そこは米国ワシントン州ハンフォード。その工場は今も環境を汚染し、人々は被曝し続けている。これはまさに「チェルノブイリ」そのままだ。

「イラクーハンフォードー広島」そして「チェルノブイリ」。世界に点在する核の被災地。いや、実は私達の日常にも、それは押し寄せている。(山盛)

連載 35 核燃料サイクルに見切りをつけ、新エネルギーに全力を

東京電力に始まった原発の事故隠しにより、「この夏は停電になるかもしれない」という恐怖が、電力会社ばかりでなく企業にも波及し、対策におおわらわという。良いことだ。これまで日本は、好きな時に好きなだけ電気を使うのが当たり前だった。電力会社は顧客のニーズと称して、夏のピーク電力需要にあわせて発電所を建設し、年間を通せば稼働率は半分もなかった。建設費の高い原発の運転を優先し、火力・水力を休ませて資金回収を急いだ。原発の事故隠しには、必然性があったのである。改めて原子力エネルギーの未来を冷静に見極め、次代のエネルギーに取り組むことが急務である。

原子力も化石燃料

かつて、「原子力は人類をエネルギーの制約から解放し、未来を約束する」と説明された。しかし、今原子力の未来は石油なみに暗い。OECD（経済協力開発機構）によれば、エネルギー源の寿命は、石油が 40 年、天然ガス 61 年、石炭 227 年、ウラン（原子力）は 84 年とされている。しかし、このウランの可採年数には問題がある。ウラン回収率を 100%と仮定しているからである。石油や石炭と違い、ウランは鉱山からの採掘だけでなく、精製・濃縮などのプロセスでのロスが大きい。回収率が 50%なら、ウランの寿命は 40 年になってしまう。ウランは石油なみに寿命の短い化石燃料である。20 年前、石油の寿命は約 60 年といわれた。過去 20 年に、人類は着実に化石燃料を消耗してきたのである。世界経済が今後発展し、アジアやアフリカ、南アメリカでのエネルギー需要が増大すれば、今の寿命予測は一気に短縮する。イラク戦争は、もしかしたら、今後ますます激しくなる「世界の石油争奪戦」の始まりだったのかも知れない。この石油危機を、原子力が救うことは出来ない。石油と同様に、枯渇を待たなければ化石燃料だからである。

核燃料サイクルに未来はない

かつてウランが、無限のエネルギー源だといわれたのは、「もんじゅ」タイプの高速増殖炉がいずれ実現すると考えたからである。高速増殖炉で、「燃えないウラン（劣化ウラン弾に使われた廃棄物）」を「燃えるプルトニウム」に変換できれば、エネルギー源としては約 100 倍に増える計算だった。しかし、高速増殖炉開発から 50 年経った今、「夢の原子炉」はまさ

に「夢」でしかなかったことが明らかだ。高速増殖炉の変換効率の悪さは、ひどいものだった。

寿命が 30 年しかない「もんじゅ」が、1 年分の燃料（燃えるプルトニウム）を作り出すには、95 年かかるのだ。すでに廃棄が決まったフランスのスーパーフェニックスは、最も進んだ高速炉だったが、プルトニウムを増やすことはついに出来なかった。無限時間かかるのである。ドイツのカルカー増殖炉は、挿入したプルトニウム燃料が増えるどころか減少した。ソ連の BN600 炉は 130 年かかった。最も早く高速増殖炉に見切りをつけたのは 1977 年、カーター大統領のアメリカだった。結局、高速増殖炉の期待は裏切られた。増殖率を今より上げようとするれば、制御が不可能な、限りなく原爆に近い設計になる。世界はこうして高速増殖炉による核燃料サイクルをあきらめた。

未だに夢から覚めないのは、唯一日本の専門家と政治家、そして自主的な判断能力に欠ける電力会社の幹部だけである。彼らに日本のエネルギーの未来を託すのは危険である。彼らは 1 年後の自分しか考えないが、残された 40 年はすぐにやってくるからだ。

省エネルギーと新エネルギーが未来をつくる

停電は日本の人々にとって、エネルギーを考える良いチャンスになろう。無駄を省き必要なエネルギーに集中する必要がある。再生可能エネルギーの技術革新は、今格段に進んでいる。家庭の燃料電池は目前である。太陽の力を借りれば、水さえもエネルギーに出来る可能性がある。緑の植物は、太古の昔からそれをやってきたのだから。

(河田)

03・チェル救恒例

・夏の合宿…

<先ずは、事務局長就任ご挨拶>

チェル救恒例・夏の合宿が、昨年と同じ、中央・南アルプスを望む伊那谷で行われた。参加メンバーは、運営委員 12 名と、我関せずのギャラリー「犬の“きーちゃん”」である。準備は、救援・中部の伊那メンバー小牧さんによって、周到に行われた（ありがとうございます）。私にとって、この伊那は因縁の地である。大好きなところではあるが、気を許すと思わぬ異にはまるところでもある。



<思い起こせば一年前>

まじめな私は、その後に起きるおぞましい事件など露ほども想像せず、張り切って（ちょっと疲れ気味でもあったが）合宿に臨んだ。長時間の会議に疲れを覚えた私は、食事後のカンタンガクガク・言いたい放題・飲み放題の「真夏の夜の夢」的交流会をそっと抜け出し、ベッドに入った。そして翌朝。何かおかしい…なあ～んだかおかしい。なあ～～～んだか変！ 皆が怪しげな笑みをその口元に浮かべている。（…「人事」は夜作られる…。）

—思い起こせば、今私が「事務局・ちょ！」否「事務局長」に就いているのは、この「真夏の夜の夢」的交流会の記憶喪失的 T 教授の発言に起因しているのだ。あ～あ、あの時起きていれば！！ その後、前事務局長の「やめたい。お願いやめさせて！」連呼に、人のいいおめ下さいたい私は、まんまとはまった（河田さんご苦労様でした。今まで同様助けてください）。かくして、私は未熟ながら「事務局長」を仰せつかり、皆様のご協力のみを頼りに「事務処理場」（事務所とも言います）にて、健忘症と戦いながら、この活動をやって参りますので、よろしくお願ひいたします。…という訳で、私は今年の夏の合宿には、「気を許して先に寝てはいけない！ 飲んでも寝るな！」の教訓のもと臨んだ。



<そして、今年の合宿>

今年の合宿は、「2004 年度の支援のあり方」についての議論に、多くの時間が費やされた。そして、私達の救援活動の基本的なスタンスは、「国や政府の援助が得られやすい大病院に対する支援ではなく、末端の地区病院・診療所といった、被災者の顔の見える支援」に重点をおくことが再確認された。高額な医療機器を要請してくる大病院に対しては、病院自体が国のしかるべきところへ支援要請なり助成申請をするよう、自助努力を求めるべきであり、私達は、「地域における初期治療の充実」に向けて、私達の支援が届くようにしていきたいということが確認された。つまり、より被災者に近い「草の根支援」ということだ。

また、新たな事業についても議論された。田中代表の報告（次ページ参照）と重複するので後は略すが、ともかくもチェル救 14 年目の活動を、より充実したものにしようということで、2 日間にわたり、活発に議論は行われた。もちろん、「小牧山荘」（伊那のメンバー小牧さん所有の心地よい山荘）での、「手作りぶつ切りの漬物」食べ放題の交流タイムは、賑やかに深夜まで続いたことは言うまでもない。しかし、勿論、私は最後まで起きていた。 （山盛）

転換期のチェル救 / 今後の活動の方向 合宿での議論から

(田中良明)

チェル救が転換期を迎えていることは明白です。その現象を箇条書的に示すと、

1 従来のやり方の行き詰まり

- a 寄付金の減少。ボランティア貯金分配金・外務省 ODA 助成金が多年にわたることから受けられなくなった。
- b 支援事業の固定化・マンネリ化。
- c スタッフの固定化・高齢化。



2 新しい動き

- a 新しい公的助成制度の出現（「日本NGO無償資金協力」・「草の根援助」）、民間の支援制度の発掘（カタログハウス「チェルノブイリ・カンパ分配金」）
- b 新しい事業形態の登場（診療所整備事業・サナトリウム利用支援事業 etc.）
- c ボランティア志望者の急増

ホステージ基金からも、1のaに絡んで、支援先を「州立小児病院」と「市立小児病院」に絞るべきであるという提案が出されていました。

このような状況を踏まえて、合宿では主に、これからの活動の基本的な方向について議論されました。6人からペーパーが提出され、活発な議論になりました。強いて結論を出すことは考えていなかったのですが、基本の基本については一致が得られました。

それは、「チェル救は、草の根の支援を重視する」ということです。「草の根」というのは、被災者・被曝者自身のことであり、また医療施設としては、「地区病院や移住者村診療所」のことです。

“草の根支援”を重視することにした理由は、

- a 中央集中をよしとする気風が根強く、行政の被災者支援切り捨てが進行しているウクライナでは、いちばん支援を必要としている存在である。
- b 草の根支援は、現地に接点をもつチェル救でこそ可能な支援であり、草の根支援には踏み込めない他のNGOや政府との役割分担として、チェル救が取り組むべき領域である。

地域医療が充実すれば、高度医療に回る患者を減らすことができるし、全体的にみればその方が有効であるという意見もありました。

具体的な事業としては、移住者村診療所を拠点とした事業（母子保健事業や巡回診療事業など）と、ナロジチなどの汚染地区での食料生産・供給事業（汚染地区でも、詳しく調査すれば作物栽培が可能な非汚染地を見つけることはできる）が話題に上がりました。

前者は、現在計画中的「移住者村診療所への医療器具提供事業」がうまくいけば、そこからの展開として可能性があります。後者は、現地に熱意があることが前提条件です。今なお続く、森林火災消火による消防士の被曝を、防止するための取り組みの必要性を指摘する意見もありました。

ボランティア志望者の急増という現象についても議論になりました。スタッフの固定化による弊害（一人ひとりの負担増、新しい活動の提案が出てこないなど）を打破する絶好のチャンスであり、受け入れ態勢を整えて、継続的に活動に参加してもらえるように努力すべきであるということで、全員一致しました。チェル救は新しい歩みを始めました。これからも一層のご支援をお願いします。

アレクシエーヴィチさん 名古屋講演会

共催団体紹介

アレクシエーヴィチさん講演会は、東京・大阪・広島・札幌・長野、そして名古屋と、日本を縦断して行われます。「国際交流基金」の助成金もいただけることになり、順調に計画も進んでいます。

そして、私たちの名古屋講演会は「チェルノブイリ救援・中部」を中心として、中部地区の4つの市民団体が共催するものです。以下、その共催団体に自己紹介をしてもらいました。

「きのこの会」(中川 徹)

「きのこの会」の誕生は1977年。立ち上げの時は「反原発きのこの会」といった。別に「反原発」をおろした訳ではない。数年前に変更したが、その何年前かから、「反原発」と言ってしまうと、もうそこで「ああそうですか」とコミュニケーションが断たれる感覚がある、ということがメンバーの中で言われていた。ちょうど、社会の雰囲気は「反原発」ではなく「脱原発」に変化してしばらくの頃。しかし、今振り返ると、「反原発」を取ったことで、コミュニケーションの壁が少しでも取り除かれたか…という点には、疑問符がつく。かえて、何をやってるグループかの説明が必要になった。

たぶん「きのこの会」が他の市民グループと一番違うところは、運動の「構え」を意識し、強調したところだろう。例えば、代表制をとらない。会費はなくカンパで、会の旗は作らないし、ありえない(主張を書いた横断幕や旗は何本作ったことか…)。メンバーは、一人一人が“全体”を目指す。チラシも書き(当時はガリ切り)、看板・横断幕も作る。集会やデモの手続きを行う。つまり運動の中の分担をやめ、運動に必要なマニュアルを個人がすべて身につけようとした。メンバーがどこに転地しようと、そこで行動が始められる。このような希望を通信誌に託して、「孢子」(どこに飛んで行っても、そこで芽を出す)と名づけた。旗を拒否したことも、旗は会ではないから。“会”を実体化しない。

20 数年続け、いろいろな運動の局面を見てきた。今は低調期といえるが、質的には重大な局面である。ひとつは、高レベル廃棄物処分の問題が目前のものとなったこと。もう一つは、核武装化への対国内世論への関わりが登場しそうな事。長くやってきて改めて思うことは、運動はいつも、「なにか」(原発とは何か)・「なぜか」(なぜ原発に反対か)を常に問いつつコミュニケーションし、新しい問題に取り組むべきだという当たり前の事。しかし、これが難しい。

「三重チェルノブイリ被曝児童救援募金」(佐藤素子)

「三重チェルノブイリ被曝児童救援募金」は、1990年に発足の市民ボランティア団体です。18年目に入ったチェルノブイリは、人々の関心もうすれがちで、また、もうなかったことにしようという動きさえありますが、だからこそ「救援」と「伝え続けること」をやめてはいけないと活動しています。『チェルノブイリの祈り』を読むと、「本当のことを私は(人は)どれだけ知っているのだろうか、知ることができるのだろうか」と考えます。もっと想像力を働かせ、もっと心の目や耳を研ぎすませる努力をしなければ、私たちの救援活動も的はずれなものになってしまいます。

「自分のやりたかったことは、真実をとらえること」という信念を持ち、数知れぬ困難の中で書き続け、伝え続けるアレクシエーヴィチさんを、尊敬と親しみの気持ちを持ってお迎えしたいと思います。今回の貴重な時を、平和を願う各地のたくさんの人々と共感し、また、しっかり学んで今後に生かすことのできる、そのような時にしたいですね。

「中部よつ葉会」(村上喜久子)



「中部よつ葉会」は、より安全でおいしい牛乳を求めて、1976年にスタートした共同購入会です。会員が自主的に運営する非利益団体で、年一回の総会と、各地域からの運営委員が毎月委員会を開き、協力し合って企画運営しています。会員相互の交流を図るために、毎年「つどい」や料理教室・講演会などを催し、また産地研修や子ども交流会を通じて、北海道を始め、各地の生産者と協力しながら、顔の見える関係を大切にしています。さら、食品の共同購入にとどまらず、子ども達の世代により安全な食べ物や環境を残せるよう、いろいろな問題にも取り組んでいます。

現在わたし達の生活は、一見豊かで平和ですが、いろいろな問題に取り囲まれています。便利な生活は、自然環境を破壊したり、健康を蝕んだり、そして一部の人々の犠牲の上に成り立っているなど、知らないで通り過ぎる事は問題です。わたし達「中部よつ葉会」は、ひとつひとつの問題を勉強し、広く伝える事を大切にしている会です。

また、三重の「アフガン・パレスチナ写真展事務局/チェルノブイリ写真展・絵画展事務局」(代表・宮西さん)は、全国各地の講演会で、写真展を併設するよう呼びかけています。

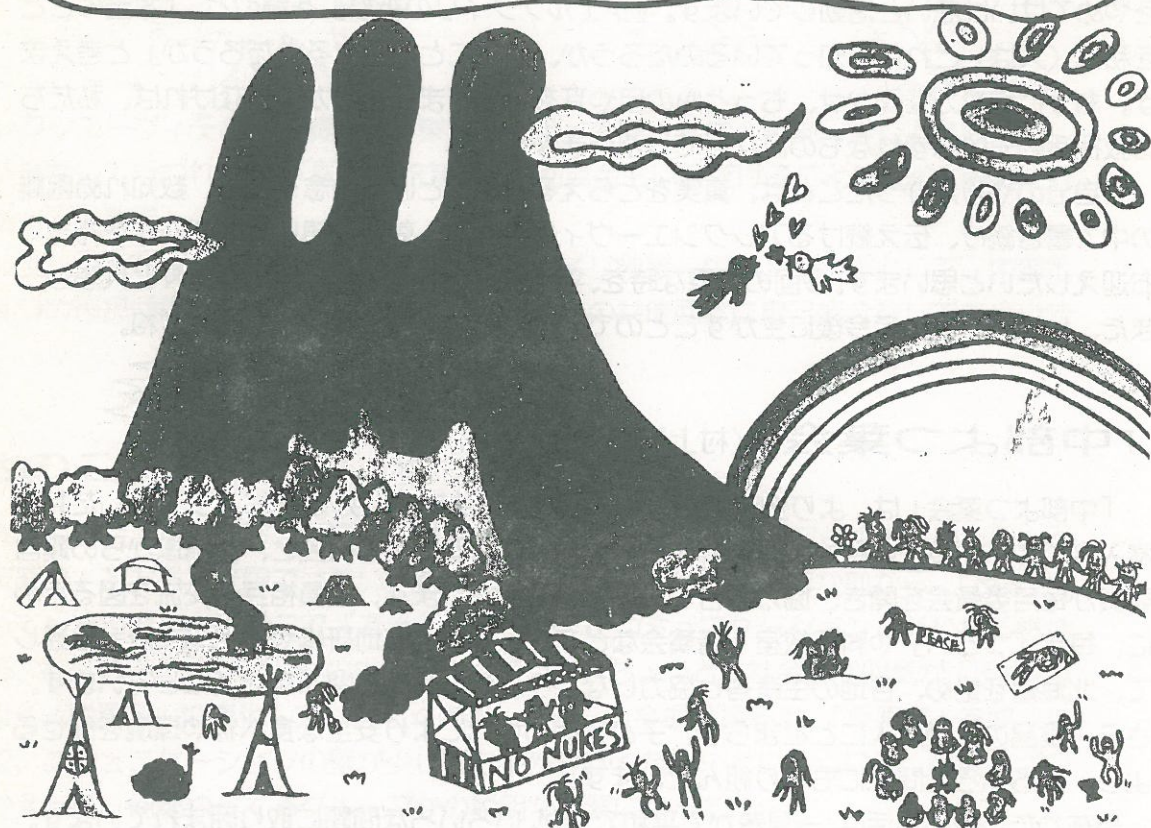
前号に掲載しました「2002年度収支報告書」に訂正があります。

『支出の列に、特別損失として140,130円を追加し、欄外の未払い金に140,130円を追加してください。』

これは専門家派遣事業の中で、旅費のうち航空運賃以外の費用が認められなかったために発生したボランティア貯金分配金の一部返還金です。この結果、当期収支差額が、▲750,271円となり、次期繰越収支差額が14,699,874円となります。なお、この追加部分についても監査を受け、理事会および総会で承認されたことを報告します。(佐保)

Gaia Greens Festival around Mt. Fuji

笑う富士山フェスティバル



「にじのむら (上九一色村)」 7/25 (金) ~ 8/25 (月)

「私たちはこんな地球に住みたい」をテーマに種々のワークショップを開催。
遊びや物作り・探検・歌や踊り・楽器演奏・アート・自然・健康・食・土や水・空気・動植物や生物・平和・社会環境・胎教や共育・セラピー・占星術など。

「富士エコパークピレッジ」 7/25 (金) ~ 8/25 (月)

「持続可能な社会」の創造を目的とした参加型の体験エコパークです。
フェスティバル用の入園料を設定。1ヶ月2,000円 (通常は1日800円)

「コンサート in にじのむら」 8月/中旬 (予定)

世の中の常識・価値観なんて世の中の流れと共に変わるもの。
この世の中に絶対というものはない。あるとすれば、それはいのち。
内容：ライブ・踊り・パフォーマンス・ポエトリーリーディング他 (参加費無料：カンパあり)

「クローリングセレモニー」 8/25 (月)

沖縄の巫女さんを迎えて平和を願い「火と水の結びの祈り」を行ないます。

詳しくは、<http://warau-fujisan.com>

竹内さんのウクライナ便り

6月19日から7月10日まで、新しいヴィザの取得などの用事もあり、1年半ぶりに一時帰国しました。6月20日には、東京のカタログハウス社で、アレクシエーヴィチ氏の東京講演の主催者の方々に会い、打ち合わせをするとともに、資料をいろいろいただきました。この会議で、氏の著書の訳者である中川妙子さんと三浦みどりさんにもお会いしたのですが、お二人が訳された氏の著作を手にしたのは、東京で泊めていただいた俳優のNさんのお宅ででした。Nさんは、昨秋ウクライナのリヴォフでの演劇祭に参加、その折が、かつて名古屋に留学していたマリヤ・イヴァフネンコさんを通訳として紹介したことから、キエフでお会いする機会があり、その後救援・中部がアレクシエーヴィチ氏の講演を企画しているということを知って、Nさんもそれら訳書を手にし読んでくれていたのです。一方、私がウクライナに戻る直前の7月9日、経費総額7億6,800万ドルの「新石棺」建設が来年から始まると発表されました。高さ100m・幅260m・重さ22,000tのアーチ状の鋼鉄製の覆いは、2008年に完成を予定、「100年はもつ」ように設計されているそうです(『キエフ・ポスト』紙、7月10日号の記事による。以下同様)。この「新石棺」は現在の「石棺」の近くで建設され、レール上を移動させて、「石棺」の上に被せるのだとのこと。西側約20カ国及びEUとウクライナで構成された「チェルノブイリ基金」が7億2千万ドルを調達、残る5,000万ドルはウクライナが自力で出す計画ですが、基金代表ノヴァーク氏によれば、すでに2億ドルは使われている由。何のために使われたのかは、記事に書かれてないのでわかりません。現在の「石棺」補強のため7,500万ドルを提供する協定も、上記の資金提供国間で結ばれたということです。チェルノブイリ原発の敷地内に建設中の「世界最大の使用済み核燃料貯蔵施設」及び液状放射性廃棄物処理施設は、2005年に完成予定。6月、チェルノブイリ原発関係者は、「石

棺」は「つのり行く懸念の元ではあったが、深刻な脅威を与えるものではなかった」と発表。



この記事では、「石棺」内に残された放射性物質の量は4,500tと見積もられています。同じ『キエフ・ポスト』の別のページには、ウクライナのいわゆる第2ゾーン(強制疎開汚染地域)に住むおよそ5万人の体内被曝の問題が取り上げられており、キエフの農業生態学・バイオテクノロジー研究所の研究者が、ウクライナ西北のヴォルィン州の汚染地域の村で住民の体内被曝線量を測定、線量が高い場合には家族一同を測定するとともに、その食品(水・牛乳・パン・ジャガイモ・肉・ベリー類とキノコ)のサンプルの線量を測る調査を行った旨、報道されています。過去3年の体内被曝線量は比較的低かったが、それはその間雨が少なく、ベリー類やキノコが育たなかったことが幸いしており、雨の多かったこの夏、これからキノコのシーズンが始まるのが指摘されています。実際、私がキエフに帰って来た時には、アパートのそばの街路樹の根元に数種類のかなり大きなキノコが生えており、昨年には見かけなかったものでした。もっとも、その後数日の乾燥と暑さで、ほとんど姿を消しましたが…。上記の研究者ヴィターリイ・クトラフメートフ氏によれば、成人・児童を問わず、**現在も許容線量を超える体内被曝**のケースが認められるものの、国は実質上状況を改善できず、期待できる最善のことは、強制疎開区域の**新版汚染地図**の完成。新しい汚染地図が完成すれば、それに基づいて「**一部地域での農業を禁止し、別の区域を除染努力の対象にする**」ことができるようになるからだと思います。アメリカのフルブライト奨学金を受けて、汚染された食料による被曝の軽減を研究しているオレーナ・ウェルハルシュ氏は、クトラフメートフ氏に同行、自作のパンフレット「汚染地域の生活のための基礎情報」(汚染地域での食品調理と農業の手引き)を配付して回っているとのこと。(7月21日)

事務局便り

「長い間お世話になりました…。」と言いたいところだが…

「チェルノブイリ救援・中部」も、創立から13年が経った。「思いがけず長くなった」というのが正直な感想である。理由は、会員の熱意に加え、活動を通じてウクライナの人々との交流が深まり、親しい人間関係が出来たからだと思う。そんな中、いつの頃からか私は「事務局長」なる肩書きを頂戴した。雑多な用事に加え、ウクライナとのやり取りや、外務省・郵政省などの補助金申請・報告書作成などで、一年はあっという間に過ぎてゆく。13年は長くも短くもあった。この間、NPO法人になり体制も整った。新人が入り、事務局も新陳代謝を始めた。昨年秋に始まった名古屋NGOセンターの「新人研修」で、20代の若い二人を迎えた事は、事務局にとっても大きな刺激となり、時代の流れを改めて感じさせられた。時の流れとともに、人も代わらなければならない。そう山盛さんを口説き落とし、事務局長を代わっていただいた。私も来年は大学を定年になる。「最後の一年はゆっくり自分の仕事をしたい」と思ったが、やはり今日も事務所のパソコンと格闘している。とほほ…

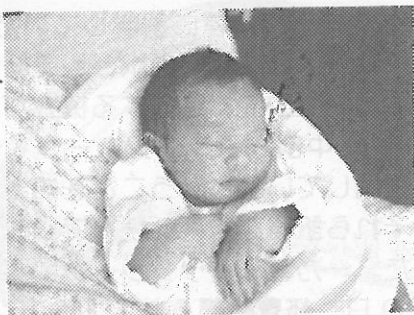
(河田昌東)

こんにちは。佐保克彦です。

7月15日ですが、娘(藍)が生まれました。おかげさまで母子ともに健康です。16日から母子同室で、私も一緒にいましたが、まだ慣れなくて、二人ともへろへろになってしまいました。助産師さんにいろいろ聞きながら、昨夜はそれなりに睡眠を取り、うまく世話ができました。

それにしても、「かわいい」とか「感動的」といった言葉では表せないような、深くて豊かな気分です。こんな気持ちになるなんて、思ってもみませんでした。

なんだか、みんなに感謝したい気持ちです。



編集後記

- ☆頭上で蝉が鳴いている、と思ったその瞬間、その蝉が死んで落ちこちてきた。そしたら目にもとまらぬ速さでカラスがくわえていった。自然って無駄がないな〜と妙に感心。(佳)
- ☆「国際交流基金」からの朗報で気分は上々。よおし気合を入れて！ん？今夜は、はかどるはずだったのに、なんでこんな時間なんだあ？またまた朝帰りだあ…(涙)。(美)
- ☆ユダヤ教・キリスト教・イスラームと、「唯一絶対の一神教」の世界は戦いが果てない。今、世界平和にとって、「多神教」の『調和』が解決の道…?!? ああ、神様、仏様…!!(京)
- ☆「自由党(小沢)」と「民主党(菅)」が一つになり、正真正銘の「第2自由民主党」が誕生する。「共和党」と「民主党」、その上に「ロスチャイルド一族」というアメリカの図式が、日本でも確立することになる。日本が「合衆国/ジャパンプ州」となる日は近い!?(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473